

とつての任務の重大さが、肩にかかつておるから、部隊幹部は相当の努力が必要であつた。

南支軍

湘桂作戦緒戦参加

神奈川県 星 澤 實

「一号作戦」とは「湘桂作戦」「粵漢作戦」「京漢作戦」及びその他関連作戦の総称である。この作戦名、湘桂（衡陽―桂林）、粵漢（広東―衡陽―漢口）、京漢（北京―漢口）は皆鉄道名である。これらの各線の要衝地域、特に在支米軍基地が含まれていた。

「一号作戦」は昭和十九（一九四四）年四月十八日～五月九日の京漢作戦により開始され、第十二軍は南部京漢鉄道を打通し、北・中支の戦線を結んだ。

続いてが湘桂作戦であるが、「湘」とは湖南省

であり、「桂」とは広西省、「粵」とは広東省のことである。従つて第十一軍（呂兵团）が「湘」から「桂」へ、第二十三軍（波兵团―南支派遣軍）は「粵」から「桂」へと行動し、柳州攻略はむしろ南支軍によると予定されていたのである。

そもそも、「一号作戦」実施については、昭和十九年一月「大陸命第九二一号」をもつて発令されたのである。第二十三軍に対して支那派遣軍は次の要旨の指示を与えた。

一、任務

昭和十九年六月頃第十一軍をもつて武漢地区から攻勢を開始する。第二十三軍は六月末頃一部をもつて北江に沿い作戦して第七戦区軍を牽制し、第十一軍の作戦を容易ならしめる。七月末頃、第二十三軍をもつて広東地区から作戦を開始し、第十一軍と呼応して敵を撃破し、桂林及び柳州附近を攻略したのち、遂川（広東北北東三七〇キロメートル 粁）及び南雄（広東北北東二四〇粁）附近の敵飛行場

を覆滅する。

次いで状況許す限り昭和二十年一、二月頃、第二十三軍をもって南寧附近を攻略し、桂林・諒山（南寧南西方一七五軒）道を打通確保する。

二、兵団運用及び兵備

広東地区に独立歩兵旅団二（第八―肝・第十三―直）を新設し、中央から第二十二（原）師団を転用増強する。

進行作戦兵団は、第二十二、第四百四師団、独立混成第二十二（節）、第二十三（純）旅団の二個師団、二個旅団とし、一独立混成旅団、二独立歩兵旅団（独立混成十九―潮、独立歩兵第八、第十三旅団）をもって従来の占領地域を確保する。これがため、第十九、第二十三兩独立混成旅団の欠数大隊を補強するほか、所要の砲兵、通信、輜重兵及び兵站諸部隊を補強する。

三、後方

在広東後方諸施設及び資材を主とし本作戦のため追加補給輸送の総量は約十六万総屯とする（第

二十二師団の転用を含む）。

第二十三軍は、二個師団、二個旅団での進攻では、到底柳州附近を含む西南中国要域確保と南部粵漢鉄道沿線地域の確保は責任を持ってぬと意見具申ししたが、

「派遣軍としては全般兵力運用の関係上我慢されたく、特に余漢謀工作に期待する」と答えるのみであった。

蒋介石軍の第七戦区司令官、余漢謀と南支軍との間には、必要以上の摩擦は避けるという暗黙の了解に近いものがあつたようだとは、我々も薄々聞いたことがある。

広東に財産や基盤を持つ実業家や軍人・有力者達は戦禍を恐れていたし、特に一般大衆は、それが日・蔣・共どれであっても平和で生業につければと望んでいる。これは、北よりも南支にその気運はあつたことを、我々自身として感じていたことである。

軍の主とするところは戦鬪であるが、それより大切なことは「戦わずして目的を達成すること、更には戦わざることである」これこそが兵法の要諦であつた。半面は兵力関係等の事情はあつたにせよ、南支派遣軍と余將軍のつていた処置は高く評価されるべきであつたのではなからうか。南支軍の方針は「対民衆軍紀の確立」であると、我々自身も常に部下に言つていた。

常時、湘桂作戦前の南支軍の兵力は、一個師団、三個旅団のみで、南支の治安を維持し、軍の目的を達していたのであらう。

湘桂作戦は、昭和十九年六月二十三日、四日頃から一斉に行動を開始したのである。その緒戦である西江沿岸の三埠附近の陣前戦、第一次竜山攻撃の状況について記述する。

三埠附近から敗走した蒋介石軍である第五百十八師団麾下の敵は、長沙西北西竜山（竜頭新田）を前進基地として、樓岡圩―開平県城水路以東諸

部落を傘下に収め、失地奪回の機を窺つていた。我が大隊は情報により敵の反撃企図を知り、之を先制破砕すべく総力を挙げての攻撃を決意した。

七月一日、予備隊第三中隊を尖兵中隊とし第二中隊を右翼より、第一中隊、第四中隊の諸隊を主力とし、旅団山砲一個中隊をも併せ出動を命じた。第三中隊長は、直ちに將校斥候として芝田見習士官を派遣、敵情偵察を命じ、攻撃目標、集地点、経路、渡河地点等を確認せしめた。

翌日、〇三・〇〇、大隊は行軍序列により第二中隊駐屯地四叉路に集結をしつゝあつた。第三中隊は長沙北東河川渡河に時間を要し、かつ、最後尾渡河の第一小隊（山本小隊）及び重機関銃一個分隊は渡船の浸水が甚だしく、漸く沈没は免れたものの、既に中隊主力は根本分隊長等誘導班を残置、第二小隊（芝田）を尖兵として集結地に向け出発していった。山砲隊は四叉路附近に砲列を敷き、援護隊勢を整え、各隊尖兵を先頭に進撃を開始した。

尖兵長芝田見習士官は、連絡下士官池田軍曹、教育係助手柴田兵長を両側に、伝令内越勇吉、弾薬手、酒巻一等兵その直後に続いて前進していた。文字通りの漆黒の暗夜である。石畳みの道路は田中を真つ直ぐ部落まで伸びていた。闇の中には横たわる稜線が漸く目に入る。しかし、部落入口は両側の竹藪で挟まれ、遠方からの発見は困難であった。尖兵はむしろ、攻撃目標斜め前方の竜山の敵を警戒、攻撃を準備せんとしていた。

その時、正面より猛射を受ける。咫尺の間である。入口が竹藪に遮蔽された塹壕の敵は、先頭集団を引き付けるだけ引き付けて、狙撃というより、我が尖兵の集団に猛射をしたのである。それは、余りにも至近距離であり過ぎた。

芝田尖兵長、内越一等兵は腹部、脾臓破裂（軍医の言）であり、永井収三軍医等の手当の甲斐なく、二言、三言の遺言を残し、戦友瞑目の間に散華していった。酒巻一等兵は（翌年六月三日、牛岩壠で戦死）大腿部に銃創受ける、応急手当を受

ける間、よく苦痛に耐えていたという。

瞬時、難をのがれた池田軍曹、柴田兵長は、これに応戦し、敵は将校の死体を放棄し部落内に退却して行つた。

私の乗つた民船は老朽で沈没しかけたが、とにかく、渡河することができ、遅ればせながら上陸すると、芝田小隊の根橋伍長が私らを待っていた。急遽前進、本隊に着いたが、前述の如く、後輩の芝田見習士官は既に息を引き取つた後であった。前任小隊長とし、私が尖兵であつたら、芝田を殺さずに済んだらうと悔やむ心でいつぱいであつた。

「芝田の仇を討つのだぞ」と部下を率いて部落内を駆け抜けた。大隊主力は、道路両側に待機、攻撃の準備中であつた。追及した我が小隊は先頭となり一気に左側高地を占領。重機関銃一個分隊及び左翼第一中隊の室村小隊の援護のもと、飛弾を排して、西端台地を占領した。私も、芝田戦死の責任を心の隅に感じながらの戦闘で気が立って

いたので、先輩の柴田中隊長から「山本姿勢が高過ぎるぞ」と、思いやりの注意を受けたりしたことを覚えていいる。後に思ったことだが、このように気がたっている時は理性を失い、戦死することが多いのかも、反省をしたことである。

敵主力は、西端台地と田圃をもって隔てた部落に拠り、望楼、民家の銃眼より本格的射撃を開始した。我が小隊は重機関銃等全火力を発動、応戦するも之を鎮圧するに至らぬ。これがため擲弾筒をもって制圧せんと射撃を命じた。名手早川上等兵の一弾は中央望楼に命中す。擲弾筒射撃の真価は、「敵を圧倒震駭せしむるにあると操典にあるが」、まさにこの中央望楼屋上に命中した一弾が、敵退却の因をなし、山砲の直接照準と同じ成果を挙げたのである。

早川上等兵は、実弾演習の折三〇〇メートルの距離より石油缶に命中せしめた程の名人であったから、この実戦において真価を發揮したのであ

る。その早川も、翌年、柳州附近の大鳥山の戦闘で名譽の戦死を遂げたのである。

戦後、早川家を弔問した折、妹さんが「母は、兄が戦地へ出発する時、面会できず、『雅男には可哀想なことをした』と悔やんでいた」とのことである。

このことは、戦地出発の時、品川駅での、線路を挟んでの面会の機会を作ったのだが、急のことで、面会に間に合わず、折角の機会は連絡の不充分で、親子の面会が実現できなかった。今は亡き母堂のことを、私は今でも思っている。

この一撃で、敵本拠の部落望楼から黄色の制服を着た敵が算を乱して潰走する。均衡は完全に破れ、第三中隊各隊は全力を挙げて追射した。

大隊長井上大佐は、第一中隊に左第一線を命じ、第三中隊第一小隊（山本隊）は本部予備隊とし、暫時休養を命じてくれた。芝田小隊長戦死後、待ったなしの追撃戦闘に対しての親心であつ

たようである。しかし、敗走する敵部隊中に乗馬将校あるを発見し、大隊長は直ちに山本小隊に対し「追捕獲せよ」を命じた。

小隊二十余人に部落左側畦道を一団となり追及した。やがて、彼我入り乱れての乱戦となり、落合軍曹は、敵兵を捕獲すべく組み打ちとなり、更に志村上等兵はこれを斃す。山口伍長等は敵と遭遇、機先を制して刺射殺する。田、丘、部落、一拠点を奪り、また次の拠点を、縦深陣地の攻撃であつた。遂に、敵抵抗の暇を与えず、楼崗坪―開平泉城間のクリークの線まで追い落したのである。

右に第二、左に第一、中央に第三中隊を配した攻撃は先陣を競うが如く併列して敵を圧迫したのである。

しかし、乗馬将校は発見するに至らず、また、敵兵の多くは部落内に隠れ、軍服を脱し、農民を装った形跡があつた。しかし進撃速度と、部落の数等を勘案する時、徹底的部落掃討、検索は不可

能であつた。

傘下、山砲隊は頑強なる望楼に対し殆ど直接照準で次々に破壊せしめ、敵の反抗を封じつつあつた。前記のクリーク以来の戡定を終了した時刻に概ね太陽も中天に輝く頃であつたか。

兵は不眠、戦闘また戦闘。追撃の連続に、休止、食事の暇もなく奮闘した。炎天下既に水筒の水は無く、疲労のため、飯盒の食事も思うにまかせぬ状態であつた。

午後、大隊は初期の目的を達し、隊伍を整え駐屯地に帰還した。これを期に敵の蠢動は漸く終息したかに見えた。

このような小戦闘が、中、南支各地に於いて、敵状を偵査把握しつつ実施され、少なからぬ犠牲が生じたことは事実である。こうして各隊は実戦を体験しつつ戦闘能力をつけていたのである。これが、軍隊で言う「弾数をくぐる」ということであつた。

【解 説】

筆者の代理として、戦闘の尖兵長として戦死した、芝田見習士官と同行した連絡下士官（先任下士官）池田軍曹は、その状況につき次のように報告をしてくれた。

出動間際に、我が小隊は中隊長より尖兵を命じられた。芝田小隊長は、近く少尉になることになっていたが、実戦に参加するのは初陣であろう。私は小隊の連絡下士官として芝田小隊長の指揮を援護することになった。

行動は開始された。尖兵の任務は重大である。唯、地図と磁石の針を便りに未知の土地を進む。後方には部隊が続いている。部落を避けながら主に田圃道を進んだ。真つ暗なため窪みに足を滑らせてどきりとさせられる。

突然眠りの鳥がバタバタと羽音を立てて奇声を発し、背筋を冷りとさせる。時々、犬の遠吠えも、部落近しを思わせる。その頃ようやく物が見

えて来た。丘の麓のようだった。

更に進む、森のようなものが前面に展開して見えて来た。この時、私は敵陣近しと感じた。芝田見習士官に小声で「部落近し」と伝えた。

小川に石橋が掛かっていた。そこを渡ると道幅が広く開け直線路だ。そこを数十歩進んだ時であつた。前方に人影が近付いて来た。殆ど手の届く所まで接近して来た。咄嗟に芝田と私は身構えた。人影は狼狽して体をかわし逃げた。

その逃足の早さに逮捕することができず姿を見失つた。芝田小隊長は軍刀に手をかけ、私は銃を構えて追跡した。前方で何やら人声が聞こえた。瞬間、目前にパツパツと閃光が発し、ピンピンと金属の鋭い炸裂音が雨のように激しく撃ち込まれて来た。機関銃の掃射だ、我也反撃する。

空は明るさを増したが、視界は未だ暗かつた。激しく射ち続ける盲射に流弾は地上を掠めて光を發した。容赦なく射ち続ける機関銃に接近して行つ

た。芝田小隊長が来ない。後方に異様な唸り声が出る、誰かやられた。私は直ちに機関銃分隊を前に出す。

黎明の戦闘が開始されると、敵は後退を始めた。後続部隊も戦闘に入り、重機関銃の撃ち出す閃光弾の発射が弧を描くように敵地に射ち込まれるのが印象に残る。

やはり芝田小隊長は銃弾を受けて苦しそうに唸っていた。「芝田小隊長！ 確りしろ」。片腕を取り私の肩に掛け抱え上げたが立てなかった。腹部を貫通され鮮血に染まり、肩中からも血が流れていた。苦しそうだ。脈を押さえて見たが途切れ途切れだった。どうにもならない。

私は唯「小隊長！ 小隊長！」と叫んだ。隊長は苦しい息の中から「池田軍曹、後を頼む」唯一言、それが最後だった。

私は、大きな声で「後は引き受けた」と叫ぶように言った。間もなく首を横にして息が途絶えてしまった。

本来なら、筆者が前任将校として引き受けるべきだったが、初陣の芝田見習士官が身代わりに死んだのか、と、戦後に至るまで悔やんでいるのであるが、戦闘での生死を分けるのは、紙一重の差であり、軍隊とはこのように、生死、幸、不幸を分けるのであることを、芝田見習士官の死を、側身にあつた池田軍曹の手記をもって解説に代えるものである。